

# 書評 ロー・ダニエル『竹島密約』

草思社、二〇〇八年十一月

野副伸一

竹島（韓国名独島）を巡る日韓の対立は、両国民に不快感を与え、未来志向、即ち今後起こるであろう大きな問題に対する共同歩調を取りにくくさせている。喉に刺さった刺が、両国民に心理的制約となっている。

本書『竹島密約』は、竹島問題を巡る対立に新たな視点を提供している。一九六五年の日韓正常化交渉でも最後まで採めたのが、この竹島問題であった。しかし両国指導層は問題を「未解決の解決策」、即ち「解決せざるをもって、解決したとみなす」という密約で乗り越えた。両国指導層の英知と胆力がそれを可能にさせた。本書はそこに至るまでの両国の交渉と内部事情を丹念に追い、戦後日韓関係の「特殊性」を浮き彫りにさせている。巻措く能わずの感がある。

本書の章立て構成を簡単に紹介したい。プロローグの「『未解決の解決』はなぜ成立したのか」では、最後の懸案であった竹島問題を巡り、河野一郎国務大臣と丁一権国務総理の間での密約成立が紹介されている。

第一章「暗中模索の時代」では、李承晩時代の日韓関係が紹介されている。李承晩ラインの設定による日本漁船の拿捕という韓国側の強硬策が展開される中で、岸信介総理は矢次一夫をソウルに派遣し関係改善を図る。しかし李大統

領と岸総理の下野で交渉は立ち消えとなる。

第二章「叔父と甥の対日外交」では、朴正熙政権の登場で韓国の対日外交は大きく進展する。経済開発を至上命題とする朴政権は資金導入を図るため日本との正常化交渉を急いだ。対日交渉の前面に出たのが朴大統領の甥の金鍾泌である。「大平・金メモ」によって請求権問題は処理され、李承晩ラインは過去のものとなる。

第三章「新しい日韓ロビー」では、政治的に失脚した金鍾泌の後釜として登場したのが丁一権総理であった。日本側でも交渉に大きな影響力を持っていた大野判睦がなくなり、その後を継いだのが河野一郎国務大臣であった。両国とも表の外交ルートと裏の外交ルートを駆使して交渉の進展を図る。

第四章「竹島密約」では、竹島問題を「棚上げ」するとの密約で処理する経緯が詳細に紹介されている。「解決せざるをもって、解決したとみなす」という「棚上げ論」は日韓双方にとつて都合の良いものであった。この棚上げ論で日韓正常化交渉は一気に妥結に向かう。

「竹島密約」は、以下のようなものである（本書p208参照）。「竹島・独島問題は、解決せざるをもって、解決したとみなす。したがって、条約では触れない。（イ）両国とも自国の領土であると主張することを認め、同時に

それに反論することに異論はない。（ロ）しかし、将来、漁業区域を設定する場合、双方とも竹島を自国領として線引きし、重なる部分は共同水域とする。（ハ）韓国は現状を維持し、警備の増強や施設の新設、増設を行わない。（ニ）この合意は以後も引き継いでいく。」

第五章「二つの喪失」では、六五年の国交正常化が四〇年以上経過した現在、竹島密約はどのような状態なのか。著者は「竹島密約は二つの意味で失われた」と主張する。一つは「紙の喪失」で、取り決め文書そのものが失われたこと、もう一つは「精神の喪失」で、金泳三政権以降竹島密約の趣旨や精神が韓国側で継承できなかったこと、を指摘する。この二つの喪失の中で、日韓関係はパラダイムの変化を遂げた。

エピソード「先人の『知恵』をいかにして受け継ぐか」では、著者は竹島密約を「浪花節的な日韓関係の産物」として高く評価している。しかしそのような両国間の文化は「親日的な世界観をもっていた軍事政権の終息とともに幕を下ろした」とする。著者は最後に「今四〇年前とは別の文化をもつ日韓両国民の英知と想像力が試されている」で本書を結んでいる。

余韻の残るエンディングであるが、本書は一部の人の間で知られていた「竹島密約」を両国の関係者とのインタビュウや資料の渉猟等で追究した点で、極めて貴重なドキュメントと言える。また「日韓癒着」とも評されるような国を超えた濃密な人間関係が織り成す日韓正常化交渉の舞台裏を活写した点で、一級の証言記録とも言える。韓国人である著者がデリケートな内容に挑戦した勇氣に敬意を表したい。